

イラン現体制の正当性の危機をめぐって (特集 イランの民主化は可能か)

著者	Ferdowsi Ali
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	182
ページ	4-7
発行年	2010-11
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00046302

イラン現体制の正当性の危機をめぐって

アリー・フェルドウスイー

●はじめに

政治的分析の手法には、やや不十分な言い方かもしれないが、客観的アプローチと主観的アプローチの二種類の対照的な手法が存在する。政治の動きを説明しようとする場合は、いわゆる客観的な事象、すなわち各種統計や経済指標、戦略的資産と戦術的資産のバランス、組織や指導者に与えられた機会、国際社会の状況に焦点を当てようとするだろう。要するに、旧来の「政治経済学」に基づいた古典的段階の社会理論のもとで集められるような要素の分析である。こうした客観的アプローチの対極にあるのが、政治の動きを明らかにする際に重要な主観的要素、つまり認知や心理に関する要素を前面に置いたアプローチである。後者の観点では、客観的な事象そのものは政治のプロセスに直接影響を与えるわけでは

なく、その間に枠組み、話法、計略その政治的対象の「意味づけ」といった認知機能が働くと考ええる。このアプローチは、特に社会・政治の動きがある国の歴史的方向を変えようという局面に至っている場合には適切である。いずれにしてもそれは叙述される必要がある、明らかにしたいと思う政治の展開について、話法の主導権を握ることが必要である。ただこれら二つのアプローチは互いに排他的なものだと考える必要はない。実際には、正しく用いられれば互いに補完し合うものなのである。

本論では、現在のイランの危機的状况のなかで台頭してきた二つの政治的主体——「緑の運動」と、革命防衛隊およびその協力者による軍事経済政権——の思想的対立と、認知的側面のひとつに焦点を当てて。特に私はある一点に注

目していきたいと思う。すなわち一方では新しい政権はイデオロギー的、政治的および文化的領域において非正当なものであるという主張、また他方では同政権がこの主張に反駁する能力の明らかな欠如、少なくとも状況の経済分野への転換能力の欠如である。私の主張は、イランの軍事経済政権が

今後永続的に強化する可能性は無視できるほど小さいということである。自らの政治的意志を実行した結果、国民に不安と恐怖しか残さないような政権に未来はない。

●歴史的な分水嶺としてのクーデター

心理的なジェットコースターのようだった二〇〇九年のイラン大統領選挙の期間中、私は同国にいた。そして、わずか二週間でイラン・イスラム共和国の三〇年の歴史が急激かつ不可逆的に転回し、二つの意志主体がぶつかり合う新たな政治的現実が作り上げられる様子を目の当たりにした。私はまた、国家機構をコントロールし、特に抑圧する方の側にいる人間が、他方の

人間に政治的意志を押しつけるために、理解できないほど残忍な方法で、断固とした専制的行動を取る様子もつぶさに目撃してきた。

政府側のこうした残忍な行動に対する反応として（三日間で何百人もの逮捕者、何十人もの死者が出た）、抗議運動の側は過去三〇年間に於いて最も決定的で歴史的な決断を下した。それはまた新たな政治的、歴史的現実をもたらすことにもなった。私はイラン国内で多くの人々から直接話を聴いたが、大統領選の「結果」が発表されてから数日間は誰もが混乱しており、この国で起こっていることを明らかにうまく言葉で表現できない状況だった。その後間もなく、生起しつつある事態に対する適確な呼称が見つかった。すなわち「クーデター」である。この呼称はたちまち人から人へと伝わり、ブログにも登場するようになり、やがて広く知られるようになって、私たちが直面している世界がよりはっきりと認識され始めた。一般にある言葉がいつも物事を明確にするとは限らないが、言葉がなければ必ず混乱を招くことも事実である。

フデー・キャッルービーが、選挙の数日後に公の場で行った「イランで現実には軍事的クーデターが起こっている」という発言において登場した。もし同氏がこのような発言をせず、また同じく大統領選候補で六月二日の選挙で次点となったが明らかかな勝者であったムーサヴィー元首相がこれに同調しなければ、そしてハータミー前大統領とハーシェミーラフサンジャーニー（イスラーム共和国の第一の重要人物）がこの表現こそが今回の歴史的事件の正確な呼び名であると言わなければ、行動しななければ、私たちが現在いる場所にこうして立っていることもなかつただろう。これは今日ではあたかも「自然」で必然的なもののように見えるが、もしこの新しい政治的意志の表明がなければ、このよう

なことは起こる必然性もなく、むしろ全く起こらなかつた可能性すらある。これまで欠如していた、あるいは無理やり押し込まられていた政治的意志が突如として表出したこの事件は、イスラーム共和国の三〇年間の歴史における最も重大な過去との決別を告げるものだ。

この三重の規定―現実の、軍部による、クーデター―は現実に対して「枠組みを与える手段」として、今やその内部においてイランの政

治的行動が見られるため、さらに重要な意味を持つている。「緑の運動」はこの呼び名とともに生まれ、この新しい政治的意志を明示する方法として一般に受け取られている。すべての研究者、活動家、政治家をはじめ、イスラーム共和国で活動しようとする者は誰でも、この標語を重く受け止める必要がある。一世紀前の社会学者も「現実であると定義された状況は、その結果として現実となる」と述べている。

●革命防衛隊と対話の放棄

私たちは、なぜクーデターという呼称が大きな意味を持ち、クーデターの実行者が今もって説得力のある反証的な説明をなし得ないのかという理由を簡潔に説明する必要があるので。二〇〇九年六月二日、

これまで長年にわたって政治勢力のバランスを保ってきたイスラーム共和国は岐路に立った。民主主義に向けて急激に舵を切るべきか、独裁的中央集権を断固として強化するべきかの選択を迫られたのである。いずれにしても、イスラーム共和国はこれまで三〇年間続いた状況をそのまま維持することは出来なかつた。より高次の国家的コントロールが可能な唯一の存在は、革命防衛隊が具現化した軍事と経済

の複合体であった。現在のイランにおいて最も基本的な政治経済的事実は、イスラーム共和国で三〇年以上もの間最も強力でも組織化された勢力として存在してきた革命防衛隊が、今やイランの経済構造と政治機構の国家的コントロールの担い手として、従来の聖職者層に取って代わっているということだ。従って、クーデターは単なる街頭の抗議行動に対する対応や国内的対立の爆発ということではなく、イラン政治にとつての歴史的な転換点なのである。これはいわば新たな経済的、政治的利益の配分のために国家機構の構成員や機能を再調整しようという試みである。

このクーデターを適切に計画するうえでクーデター実行者が抱えているジレンマは、以上我々が述べてきた構図、すなわちクーデターの現実と彼らが提示する状況説明との間にある解決できない不調和を考えてみただけで明らかだろう。彼らは、現実にはイスラーム共和国からすでに離脱しているが、レトリックのうえで自らその保護者であると表明している。彼らのクーデターには本質的な部分で矛盾と偽善が刻み込まれている。彼らの発するメッセージとその行動は決して一致することがない。イラン国

家の「プロパガンダ」の状況を追っている者は誰でも、彼らがなぜこのような稚拙で陳腐なやり方をしていのかと不思議に感じざるを得ない。なぜあのような見せしめ的な裁判をするのか？ なぜ行き過ぎた残虐行為の報告に対して中途半端に否定するのか？ なぜ継続的に（おそらく意図的に）残虐・野蛮な行為の報告がリークされ続けるのか？ これらはすべて、新たに浮上してきた軍事経済権が、彼らの過激な行動と保守的なレトリックとの間にある矛盾を克服できる説明を準備するうえで、直面する困難を示唆するものである。彼らにとつて、新たな希望や明るい未来という美名のもとにクーデターを実施したほうが事態ははるかに簡単だったかもしれない。しかしイランでは勢力の均衡をめぐる計算が常に働くため、弁論を効果的に使いこなすことは非常に難しく、彼らも結局そのための捷徑を見いだすことはなかった。イランの市民社会は確かに脆弱でまともりに欠けるかもしれないが、その規模の大きさと恐るべき構造上の複雑さのお陰で、クーデターの実行者たちが、将来の希望や約束について明快に説明することが著しく困難になっているのである。

このためクーデターの実行者らは、直截的な言葉遣いによって脅迫し、侮辱し、また恐怖心を誘発する以外にない。こうした言葉遣いはテレビで放送された大統領選の討論にもはつきり現れていた。アフマディネジャード候補の言葉は説得ではなく相手を侮辱するためのもので、希望ではなく憎しみと怒りをかき立てた。同氏は四年前に行われた大統領選挙のキャンペーンでは巧みなレトリックを操っていたが、今回は当時とは正反対である。これは選挙前からクーデターの兆候を示していたとされる政治グループのレトリックにも当てはまるだろう。選挙の数日前、革命防衛隊の政治局トップであるヤダオツラー・ジャヴァーニーは、「ビロード革命」の危機が迫っていると警告し、革命防衛隊とバシージュによってこれらの兆候を小さな芽のうちに容赦なく摘み取るべきであると明言した。アフマディネジャードのイデオロギー的な武器の裏にあるプランは、人々の頭に恐怖心を刷り込むというものでしかないようだ。

これはもちろん単純な憶測である。しかしここでもまた、選挙を取り巻く出来事―選挙結果の取り扱い、選挙結果についての不服申し立てや抗議運動に対する暴力的な弾圧、客観性や真実はおるか良識に訴えるすべての説明を放棄した国営メディアの報道―の意味を理解するための最もよい方法は、クーデターの展開する一瞬一瞬の場面としてそれらを捉え、クーデター実行者らが言葉や真実、人々の対話の可能性を貶めることこそが唯一の戦略だと固く心に決めていることを理解することである。彼らの選挙結果の取り扱いとその発表の仕方を考えてみればよい。当初から選挙結果を操作しようという大規模な計画があったために、結果を常識的な方法で発表することは不可能になってしまった。例えば僅差での当選という選挙結果については始めから準備のしようがなかった。何日もの間（そして現在でも）、選挙監視団は選挙結果のあまりの信憑性のなさに困惑させられたが、これはあたかも体制側が意図的に混乱させたかのようであった。最高指導者が無責任かつ違法な方法によって時期尚早にも勝利者を祝福したため、意味のある対話の扉は完全に閉ざされてしまった。そして政治的対話を圧力の言葉に完全に置き換えるために、選挙翌日の早朝に何百人という人々が逮捕された。こうした一連の行動は、悪意ある攻撃とクーデター

の実行が、まさに真実を明らかにするための対話の可能性を潰すために計画されたとしても考えない限り、説明がつかない。

このように考えると、見せかけの合法性を維持するためだけの、現政権の目に余る偽善的行為についても理解できる。そうでないとすれば、政権があらゆる礼儀規範を侵害し（極めて不適切な言葉の濫用）、イスラーム的規範を冒瀆し（男女を問わぬ性的虐待など）、伝統的な良識の基準（若い男は若い女性を殴ってはならない）を侵害しまた否定し、武器を持たぬ市民や被拘束者に対する凶悪な暴力行為の責任者を処罰するどころか裁判や拷問、死刑などを強行していることについて、私たちはどうすれば説明できるだろうか。アフマディネジャードに投票した人々でさえ、政府の言動を私の知る限り誰一人として支持してはいないが、体制もそのことをよく分かっているにもかかわらず、かつてスターリン主義者が見せたような言葉の暴力によって政治的意思を表明することにこだわらず、歴史、真実、そして最も基本的な公開の場での議論の要求を軽視していることを露呈し、そのことによって人々の意志

を碎くことをすら望んでいるのだ。

しかしこれが彼らの言語上の戦略であるならば、それはやがて必ず裏目に出るだろう。礼儀規範や政治的対話の重要性をひどく軽視した政権と戦うため、現在驚くべき規模で抵抗のうねりが形成されている。この抵抗は確かにイランの近代史にルーツを持つものであり、一方の圧倒的な発言力に対する他方の不満の蓄積という不均衡のなかで、事態は確実に進行し成長している。新しい政権の言葉の残忍性に反対する「緑の運動」は、六月一二日の事態を「クーデター」と定義づけることから始め、言葉の礼儀正しき、非暴力、正当性、人間の尊厳と民主主義を希求し、着実に前進している。あの日以降、彼らこそが正当性を獲得してきたことは間違いない。それと対称的に、現政権は明らかに自らの正当性を説得的に説明する能力に欠け、日々その正当性が否定されている。

●クーデター政権の行く末

クーデターの将来についていくつかの点を述べることで、小論を終わりにしたい。つぎに何が起るにせよ、クーデターが長期的に成功する可能性は極めて小さい。クーデターへの一般的な抵抗は、

現政権に高い代償を強いている。政府の支持率はかつてなく低く、現状への不満は日を追うごとに増大している。抗議運動も抑圧も多大の政治的なコストがかかるものだが、それは経済的にも損失がある。政権は宗教、道徳、国内政治の分野で正当性を失っている。イランの文化もイスラームも、これらの分野において現政権に少しも正当性を与えるものではない。

現政権が多少なりとも正当性を獲得できる分野は二つ残されている。経済と外交である。同政権は経済面においては世界の国々の中でもいろいろな意味で中国とロシアに最も近く、現政権は中国のような爆発的な経済成長を起こすことを夢見ている。実際に革命防衛隊の経済面での究極の目標は中国である。よく知られているように、中国は天安門事件の大虐殺で共産党の正当性を大きく傷つけられたが、国民に奇跡的な経済成長をもたらすことよって埋め合わせをしてきた。すでに共産党や人民解放軍と相似している革命防衛隊は、彼らと同じ成果を上げたい考えた。これが彼らの野望なのであり、クーデター政権の継続に邁進する勇氣を与えている。現テヘラン市長のモハンマド・バーゲル・ガリー

バーフ氏は明らかに、権力獲得の手段としてこうした交換（政治的降伏と引き替えに奇跡的な経済成長を達成すること）を重要視する人物の一人だ。同氏は革命防衛隊の出身であり、有力な大統領候補者だった。だが彼らが中国式の経済的成長を達成する能力について、私は大きな疑いを抱いている。

経済的な充実と政治的正当性とを交換しない限り、クーデター実行者が永続的な政治的安定性を獲得できる現実的なチャンスはない。そうすると彼らに残されるのは外交分野だけになる。しかしこれは彼らにとって、結局のところ一時的な成果として世論を紛らわすだけの効果しかもたらさないだろう。いづれにしても彼らは外交分野において、行き詰まっている核問題をイラン国民の愛国心を満足させる方法で解決するなど、具体的な勝利を挙げる必要がある。彼らは弱みや卑屈な態度を見せる訳にはいかない。彼らは国民の精神的な励みとなるような現実の、しかも明確な勝利を必要としている。イラン人の多くはもち論それを望んでおり、新たな軍事政権、革命防衛隊および民兵組織パシージュの中心的な支持者らは特にそれを切望している。しかし、外交上の危

険な賭けの結果がどのようなものでも、その影響は一時的なものではないだろう。奇跡的な経済成長だけが、彼らに永続的な正当性の利益をもたらすであらう。

●結論

どのような運動においても、シンボル、組織、戦略をはじめとする多くの要素を揃えることが必須であるが、大衆運動では特に話法上の主導権を取ることが極めて重要である。話法上の主導権が反対派の手に握られ続けているかぎり、現在のイラン政権は効果的な統治をすることができない。同政権は、野蛮な残忍性あるいは狂気にも似た一種の恐怖政治を發動して市中を何とか静かにさせているかもしれないが、枠組みや話法の点においてひとつも勝利を収めていない。他方、「緑の運動」の側の話法はかつてなく信頼性を高めており、イラン国民のより広範な層に訴えかけている。二〇〇九年の大統領選挙から一年以上が経過し、イランの「緑の運動」はその将来に向けて最も重要な分野での成果を誇るべき十分な理由がある。

(原文は英語)

(Dr. Ali Fardowski / ノートルダム・ドゥ・ナムール大学教授)